亀田図書館開館一周年記念講演会

「江南区の主な俳人たち−思い出ばなし−」

講師　蒲　原　　宏　氏

（俳誌「雪」主宰・元県立がんセンター新潟病院副院長）

講演会記録集

新潟市立亀田図書館

■　亀田図書館開館一周年記念講演会

日時　平成 25 年 11 月 10 日（日）午後 2 時～3 時 30 分
会場　江南区文化会館多目的ホール

「江南区の主な俳人たち−思い出ばなし−」

講師　蒲　原　　宏　氏

（俳誌「雪」主宰・元県立がんセンター新潟病院副院長）

船戸山会館前の佐藤暁華の句碑

（江南区船戸山 3 丁目）

目　次

講演会

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

亀田と俳句―中田みづほ、浜口今夜、高野素十、及川仙石生誕 120 年―・・・・・・・・2

「ホトトギス」入選の新潟の俳人たち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

亀田の俳人たちの思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

亀田の七福神・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

江南区の主な句碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７

亀田図書館を俳句の情報センターに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８

巻末資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１

【講演会】

はじめに

皆さんこんにちは。私は大正 12 年生まれで、ちょうど 90 歳になりました。少し“もうぐれた”ことを言うかもしれませんけれども、お許し願いたいと思います。去年の 11 月に「俳句の里―亀田郷と俳人たち―」ということでお話しさせていただきました。図書館が冊子にまとめてくださいました。皆さんのところへいっているかと思いますが、大部分のことはこれで言い尽くしているように思うのですけれども、もっと話せということで、いささか困ったのですけれども、お引き受けしました。それまでに死んでしまえば約束を果たさなくていいなと思ったけれども、どうも体が丈夫すぎて生きてしまいまして、とうとう話すことになりました（笑）。

亀田の俳人たちを全部を知っているわけではありませんが、私の知っている範囲内でお話ししたいと思います。記憶違いのところもあると思いますが、私が新潟県や亀田のあたりの俳句のことについてまとめて書いたのは、今から 17 年くらい前です。お読みになった方もあるかと思いますが、ここの図書館にもあると思います。『新潟県文学全集』の第２期が平成８年に、長野県松本市の郷土出版というところから出ました。全部で約 22 巻くらいだと思いますが、その第２期の６巻の 291 ページから 599 ページまでに、私が新潟県の俳句についておおまかなところを書きました。誤植などがあって、訂正しなければならないところが随分あるのです。これには有名人もあり、無名の人もあるのですが、私が選んだ方の略伝があいうえお順に載っています。併せて代表的な句が載っています。

もう一つは、これよりもう少し前、昭和 52 年ころだと思いますが、新潟日報事業社から『新潟県大百科事典』が出ています。この中で、医学関係、俳句関係の各人物について私が分担執筆しまして、各伝記を書いております。これも必ずしもいい句をまとめてあるわけではないのですが、この中に若干、亀田の方が入っています。故人になっている方もおりますし、まだ生きている方もおられますが、後で考えてみると、載せなくてもよかったと思うような人もいます。なんで入れたんだろうと思うような人も入っているのですけれども、もう少し時間があれば、これと似たようなものをきちんとまとめたいと思いますが、私には残された時間があまりありませんから、どなたかにやっていただきたいと思います。またこれらの本はあまり見られたことがないのではないかと思います。

『新潟県文学全集』は分冊して売らなかったのです。全巻では６万円か７万円します。新潟の人間は本に金を出すのを非常にケチる人が多くて、１万円くらいの本になるともう買わないですね。５万円、10 万円なんてなると全然買わない。新潟県は本が売れないのです。美

智子皇后妃がどうしたとか、ひっくり返ったとかという週刊誌はよく売れるらしいですけれども。『新潟県文学全集第Ⅱ期第６巻』をご覧になってください。誤植などがありますので、これを全部信用してもらっては困るのです。約 300 ページにわたって、私が 73 歳のときに執筆したものでありますが、これをご覧になっていただければ、こんな話なんか聞かなくてもいいんです。これについてご質問を私にしていただければ、資料なり何なりでお話しできるのです。まずそういうことを先に言っておきます。これらの本は図書館にあると思いますのでご覧ください。

亀田と俳句―中田みづほ、浜口今夜、高野素十、及川仙石生誕 120 年―

今、江南区なんてしゃれたことを言いますけれども、亀田という在郷に俳句ができたのはなぜかといいますと、新潟医科大学ができて、そこに東京から立派な先生が赴任してきました。その先生の指導で“**亀田のめだかが鯉にまでなった**”ということなのです。もし４人の先生が来ておられなければ、おそらくこういった発展はなかっただろうと思います。

一番最初に来たのが中田瑞穂（みづほ）（俳号　みづほ）、それから浜口一郎（俳号　今夜（こんや））、高野與巳（よしみ）（俳号　素十（すじゅう））という３人で、４人目に及川周（まこと）（俳号　仙石（せんせき））という先生です。みんな亡くなられてから 30 数年、浜口先生は 50 年以上経っているわけです。この方たちはみんな明治 26（1893）年生まれです。今年が生誕 120 年になるわけです。そこで館長さんが、亀田の俳句文化を引き上げてくださった先生方の記念ということで、それらの先生の指導で育った亀田の人たちの話をしてくれというお話で、今回の第２回目の講演の依頼があったわけです。

おそらく私が話すのはこれが最後になるのではないかと思います。間違ったことがあったら、後で文献を見て訂正していただきたいと思います。人間の記憶や記録というのは非常に誤りが多いのです。大学教授も年を取ってきて定年くらいになりますと、少しおかしくなってきまして、定年を否定したくて、戸籍が間違っているから定年はもう少し延ばせなんていう、医学部の教授でもそういうことがあるのですから、人間なんていうのはあてにならないのです（笑）。

みんな旧制高校を出て東大を出ています。今でもそうですけれども、あのころの東大出身というのはエリートです。この中に東大を出た人はだれもいないと思うのですが、灯台もと暗しで（笑）、私などもとても東大のもとまでも行けませんでした。東大の卒業が中田瑞穂先生は大正６年、あとの先生は大正７年です。１年違うわけです。高野先生は一緒に入ったのですけれども、途中で関節リウマチかけがか何かして１年留年したのです。それでこの人た

ちと一緒になったわけです。そして、みんな専門の科が違います。中田先生は外科、高野先生は法医学、浜口先生は内科学、及川先生は衛生学です。大正 10 年に新潟医学専門学校が新潟医科大学になるということで、そのとき、ほとんど東大ですけれども、教授たちがスカウトされて来たわけです。みんな三十幾つくらいで、中田先生に至っては 29 歳で来たわけです。そのとき一緒に来たのが浜口先生で、30 歳になっていたわけですが、大体この前後に赴任するわけです。助教授で来た人もいるのですが、教授になった年が少しずつ違うのです。

中田先生は 34 歳のときに教授になっています。本当はもっと後に教授になるはずだったのです。主任教授の池田廉一郎という先生が学長をやっていたのですけれども、51 歳くらいで脳溢血を起こしまして、体がきかなくなったのです。今は脳溢血を起こしましても、生きていれば定年まで残っているのですけれども、池田先生は非常に清廉潔白な人で、滋賀県出身の方ですが、治ったといえどもこんな体の状況では外科医としても学長としてもだめだ，ということで潔く辞められたわけです。中田先生は赴任して５年くらいで教授になってしまったわけです。その間、外国に２年半くらい留学しているわけですから、新潟にいるほんの少しの間で、34 歳で教授になったわけです。

中田みづほ

浜口先生は内科の助教授で、後で学長になった富永忠司という先生についておられたのです。この富永先生も後で学長をされたのですけれども、なかなか死なないし引退もしなかったのですが、幸か不幸か、昭和 13 年、私が入学する前ですけれども、新潟県の農業会で大事件があったのです。そのときの会長が富永教授のお兄さんだったわけです。今の教授と違って、親族にそういう不埒な者が出たら教授をしている訳にはいかない、ということで勇退されたわけです。それでやっと教授になったのが 43 歳です。同じ卒業でも遅れてしまったわけです。

浜口今夜

高野先生は俳句が好きで、東京でぶらぶらして、あっちの大学こっちの大学へ法医学の教授として来てくれということがいろいろとあったのですけれども、いやだと言って、自分は東京大学の教授になるつもりでもいたらしいです。ところがさっぱり勉強しないものですから、大学では早くおん出してしまいたいと思っていたところが、新潟の法医学に藤原教授という人がいたのです。その人が九州帝大の教授になって去って行かれたわけです。教授の席が空いた

高野素十

ので この辺で教授になって来い、俳句も新潟でやれるということで、中田先生が引っぱって来たのが 42 歳のときです。その前に２年ほど外国へ勉強に行かれたわけですけれども、この先生は本当に研究をしなかったですね。中田先生は非常に勉強して、日本の脳神経外科の開祖と言われるような仕事をされた方で、学問と趣味とを並行された方ですけれども、そういう点では高野先生は俳句ばかりやって、勉強はちっともしない。外国でヘビの毒の論文を２編書いただけで、新潟には 18 年くらいおられたのですけれども、論文というのは一つも書いたことがないのです。俳句の本を２冊作って出ていった先生でした。人間的にはおもしろみはある人物なのですけれども、大学としてはあまり好ましい教授ではなかったわけです。

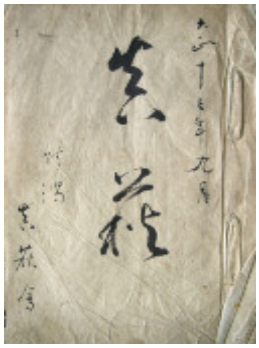
大学でこの先生の句碑を建てようという話がいつも出るのですけれども、教授会などで反対されるわけです。大学に全然貢献していないじゃないかと。俳句だけやっていて、法医学には何も貢献していないと。県の死体検案や監察医を育てたということはあったのでしょうけれども、やはり大学教授というのは論文をきちんと書いて、弟子を作らなければいけないのです。確かに弟子に３人の法医学者を作られたのですけれども、弟子は先生のテーマではなくて、自分で勝手にテーマを作って、教授になっていい成績をあげたわけです。そういう点で、大学としてはだれも顕彰に賛成してくれないのです。いまだにだめです。私たちにとっては非常にいい先生だったのですけれども、大学にいるからには、人格と学問的業績が並行していなければなりません。人格的には非常にいい人なのですけれども、学問的業績がないと大学では評価できないのです。これは非常に厳しいです。教え方が上手で、手術が上手でも、決して大学教授にはなれないのです。やはりいい論文を書いて、時代を引っ張っていくようなリーダーでなければ教授にはなれないということです。しかし、文芸の世界では素晴らしい作品がある。そういう結果になったことは，それで仕方がないと思います。

及川先生は東北大学の助教授だったのですけれども、細菌学教室で衛生学的なことを一緒にやっていたのです。学問というのは分化していくわけですから、衛生学と細菌学二つに分ける時代がきたわけです。東北大学の助教授をしていた及川先生は、ちょうど細菌学から衛生学が分離するということで、36 歳で教授になって来られました。この方も中田先生の影響で俳句をやるようになりました。教授で俳句をやられる方が非常に多くて、教授会の中に土曜会というのができまして、土曜日になると句会をやっていた。そのころは、**“新潟医科大学で俳句をやらない奴は、ミュンヘンやミルウォーキーに行ったり、札幌へ行ってビールを飲まないのと同じだ”**と言われたくらい俳句の盛んな時代があったわけです。

及川仙石

最も亀田に影響を与えたのはこの４先生です。一番多く亀田へ来られ影響を与えたのは高野先生です。亀田に来るとお酒はあるし、自分の郷里と同じような田園という環境なわけです。中田先生は島根県津和野藩の鉄砲方の子孫で侍、士族の出身です。今はもうありませんけれども、天皇、華族、士族、平民になるわけです。個人情報の関係でますます分からなくなってきて、非常に困ることもあるのですが、身分差別をしない時代になりました。高野先生は茨城県の百姓です。士農工商の農です。浜口先生は紀伊の網元、いわゆる漁師の親方の家に生まれました。及川先生は仙台の月給取りの家の出身です。仙台だから「仙石（せんせき)」、本来の名前は「周（まこと)」といいます。みんな身分が違うわけです。

教授の中でも身分というのは戦前ではうるさかったのです。奥さん同士が一番うるさいわけです。大地主から来た奥さんと、看護婦さんが女房になったのと、芸者が女房になったのと、いろいろといるわけです。芸者や看護婦さんが女房になったのは、教授会の夫人会には入れないのです。そういう時代だったのです。今では考えられないことなのですけれども、昭和 20 年以前の世間というのはそういう世界です。今は金で換算するのですが、士農工商というのは依然としてあったわけです。商が一番卑しめられるのは江戸時代と同じで、商人がごまかすのは当たり前で、今、牛肉でも何でもごまかしがある。ごまかしても、だましてもというのは一番品性が下劣だと。これは何も今に始まったことではなくて、一昔前は不思議ではないのです。商人ならごまかすのは当たり前なのです。それがいまだに続いているのです。一流のホテルなんていっても我々もだまされたわけですけれども、今の日本は詐欺が大手を振って横行している国ですからね。いらぬことまで申しましたけれども、ちょっと脱線しましたので、元に戻ります。



「真萩」の原本

（江南区郷土資料館蔵）

俳句の世界になると、こういったことを全く意識しないのでいいですね。４先生のいろいろな著作を見ますと、この先生たちの持っている思想がよく分かるのです。「まはぎ」という雑誌が昭和４年にできるのですけれども、その中の随筆を読んでいくとよく分かります。先生方が雑誌なりに戦前に書いた随筆を読んで分析していくと、それらのことがはっきり分かってくるのです。中田先生は侍の家の人ですから、非常に右翼的な思想を持っておられました。戦争賛美で、大東亜戦争に負けそうになっても、日本が勝つという句を堂々と作っておられます。**「稲を刈る音サッサッと日本勝つ」**とか**「稲舟の織るがごとくに日本勝つ」**いう句を作っておられます。また、東條英機が示達した「戦陣訓」というのがあるのですが、あなた方は知らないと思いますけれども、戦争に行ったら絶対に捕虜になってはいけないということで、

みんな自決するのが正しい事だったのです。その基になった「戦陣訓」を、堂々と自分が主宰している「まはぎ」という雑誌に載せたのです。

しかし、高野先生は、東大の研究生のときから社会主義的なものに同情を持ったらしく、戦争に関する俳句というのは一つもないのです。どこを探してもないのです。ただ、**「砲音のゆるがす土や麦を蒔く」**とか、**「妻つれて兵曹長や花ぐもり」**といったような句はありますけれども、戦争を賛美するような句は一つもないのです。

及川先生もそれはないです。及川先生はクリスチャンですから、非常に人道的な思想を持っておられました。そういう点では敬虔なクリスチャンです。宮城県仙台に東北学院というのがありますけれども、キリスト教の盛んなところであります。支倉常長という、戦国時代にローマ法王庁まで行くような人がいたところでしょうから。

浜口先生は、神様も大事にするし、仏様も大事にする人です。漁師というのは天候に左右されたり、魚がとれたりとれなかったりするのは潮流に関係しますから、信仰などには寛容な姿勢を持っておられるのです。四人の性格があって十人十色の句があるわけです。そういうものを我々は学生のときに影響を何となく受けていたわけです。

中田先生、浜口先生が主になり「まはぎ」という雑誌が昭和４年に新潟でできたわけです。まはぎ会というのがありまして、それをサポートするために、現阿賀野市笹岡の佐藤念腹という方（後にブラジルで 6,000 人もの俳句の弟子をとる有名な人になるわけですが）や、亀田で月並み俳句をやっていた佐藤暁華といった人たちがサポートして、昭和４年に「まはぎ」ができるわけです。いつまでたっても 20 ページ前後の厚さで変わらない。かえって薄くなっていくのです。創刊のときはこの３倍くらいの厚さだったのです。

高野先生が昭和 10 年に来る前後から、浜口先生は非常に病気がちだったものですから、後に高野素十先生に当季雑詠の選者が変わりまして、俳句の様相が少し変わってくるのであります。指導する目的は、高浜虚子のホトトギス系の写生俳句、花鳥諷詠というものを主にやるのだということです。

高浜虚子先生は亡くなるまでに 16 回くらい新潟県に来て弟子を指導しています。この方が来られてうまいこと言うわけです。「**亀田は写生俳句が日本で最後に残るところだろう**」なんてことを言うのです。ところが、この先生が書いているのを見ますと、あちこちで同じことを言っているんですね。非常に人を逸さない、うまい人です。私などはよく行った先の土地の悪口を言ったりしますけれども、やはり、天下に名をなす人というのは、どこへ行っても如才ない顔をしなければいけないのですね（笑）。

「ホトトギス」入選の新潟の俳人たち

俳誌「ホトトギ」

大正 12 年 11 月号（通巻 326 号）

（亀田図書館蔵）

この先生が主宰する「ホトトギス」という雑誌があるわけですが、正岡子規が創刊して、1,200 号くらい続いているのですが、この「ホトトギス」に入選するのは地方の俳人の名誉だったわけです。先ほど出た先生方はしょっちゅう出るのですけれども、昭和４年の「まはぎ」の創刊から昭和 14 年までに新潟県の人で「ホトトギス」に入選したのを調べたものがあるのです。それを見ますと、中田、高野、浜口の 3 先生を除くと一番多いのは及川仙石先生で、72 句入っていました。

次に中田みづほ先生の助教授をしていまして、後に順天堂大学の教授になる田中憲二（俳号　憲二郎）という先生がおられたのです。この人が昭和４年から昭和 14 年までの 10 か年間のうちに 58 句。家田小刀子（しょうとうし）といって、高野先生の助手も一時やったことがあり、中田先生の弟子です。小刀子というのは子どもか女みたいに思うのですけれども、これは男なのです。家田三郎という先生で水原出身の外科医ですが、この先生が 52 句入っているのです。

この何とか子というのは孔子と同じで、男の立派な人を「子（し）」というわけで、孔子と同じですけれども、俳句も虚子に「子」がついています。私などは中学のときに「きょし」ということを知りませんでしたから、「きょこ」なんて言っていました。こういう間違いは私だけだったと思いましたが、會津八一という大先生も随筆の中に家田小刀子のことを書いているのですけれども、「水原に家田ことこという女流の俳人がいた」などと書いているのです。やはり間違いはどこにでもあるものですからしかたがないのですね。この方は非常に俳句のうまい先生でした。また、面倒見もよくて、中田先生のお気に入りの弟子でありました。

これまでお話した３人とも医師ですが、その次に新潟県で多いのは渡辺軍平です。亀田の傘張り職人です。傘張りができない時代になったら会社に勤めたりしたのですけれども、会社がつぶれてだめになる。後でお話ししますが、あとは日雇い人足になったりするのですけれども、俳句を一生懸命にやられた方で、昔は江舟（こせん）という俳号でした。この方が 10 年で 45 句。

亀山先頭という方で、暁華さんと一緒にやっていた方ですが、この人は最初、剛男といいました。この亀山先頭という方の弟さんの白頭という人がいますが、この方が 10 年間で 43 句。佐藤暁華さんが 35 句。樋口盞字（さんじ）さんという、やはり亀田の人ですが、これが 17 句。亀田小学校の校長、早通小学校の校長をされた玉木豚春（とんしゅん）という先生が

14 句。やはり亀田に坂井魯郎（ろうろう）という人がおられたのですが、学校の先生です。これが 12 句。渡辺水風という面白いおじさんというか、昔は若かったのですけれども、水風さんという老人で、「このごろ学校で親たちのことをお父さん、お母さんと呼ぶように言ったけれども、おらみたいにおとと、おかかと言っているのが、お父さん、お母さんなんかいうとこちょばっこてしょうがねがね」と言うような面白い人でした。この方が３句。有名な女流の亀山其園（きその）という人ですが、この人はまだ入ったばかりですからゼロ。

そのようなことで、「ホトトギス」では大変厳選だったわけです。私なども生涯で１句しか「ホトトギス」に入ったことはありません。もっとも私は１年しか入りませんでしたから、１年に１句ですから、10 年続ければ 10 句くらい入ったかもしれませんけれども。そのころ私は学生で、先輩が、先生に迷惑だから「ホトトギス」に投句するなと言うのです。私たち医者の世界というのは非常に封建的で、それに反するといじめに遭いますから、言うことを聞かなければだめだったのです。先輩に長谷川馬刀（まとう）という、後で逓信病院の院長をされる人とか、小山遊魚というおっかない人がいました。私たちより十何年も先輩ですから、言うことを聞かないと「句会にも出るな」と、句会の入り口で帰されるわけです。そのようなことで、厳しい躾を受けたわけです。

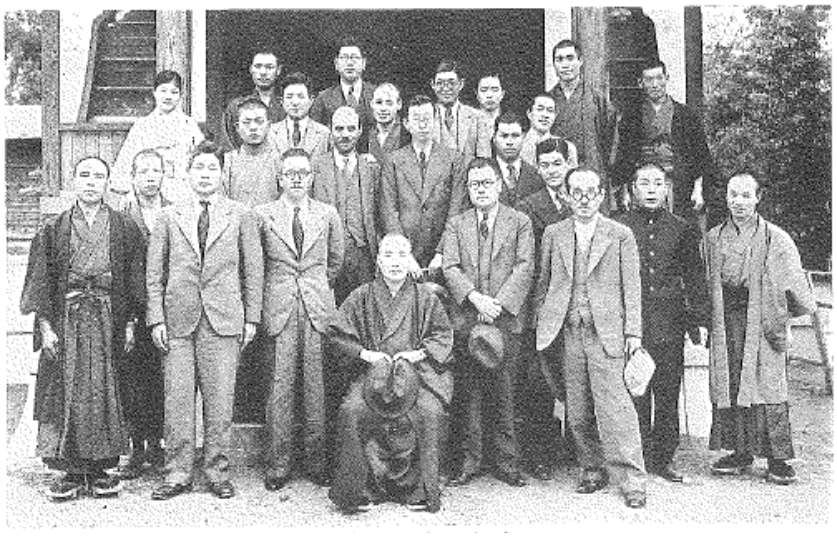
新潟県の中でもほかに少しありますけれども、これより上に出た人はほとんどありません。春山他石とかほかに２，３人いるのですが、10 年間で１句か２句ですから、非常に厳しい選です。今はあまり厳しい選をすると投句しなくなりますから、そうすると俳句の雑誌の運営も困りますから、少しは直したりして載せているのです。本当は半分くらいみんな落としたいところなのですが、そういうわけにもいきません。補導、添削してやるわけです。そういった現代とは違い、亀田の俳人達は非常に頑張ったわけです。またいい先生がしょっちゅう来ていたわけです。中田みづほ、高野素十、浜口今夜先生が新潟からタクシーで来るわけです。昭和のころはタクシーに乗るなんていうのは大変なことです。亀田に来ると片道 10 円（現在の１万円）くらいかかったのではないでしょうか。そういうような時代でありました。

亀田の俳人たちの思い出

そのころ、亀田で「まはぎ」に投句する人というのは、全部で 50 人くらいしかないわけですけれども、その中で８人くらいしか入らないのです。私が「まはぎ」に投句しはじめたころですから昭和 16 年くらいです。それから 28 年たちまして、昭和 44 年ですと、大体 100 人くらいしか載らないのです。そのときに亀田の人が９人ですから、昭和 16 年くらいに 16 パーセントくらいの入選率だったのですが、昭和 44 年になると９パーセントになります。現

在はどうかというと、私が主宰している「雪」で亀田の人の投句をほとんどとるのですけれども、それでも会員全体からすると５パーセントくらいしかおりません。亀田の人たちの俳句の衰退が現状としてあるわけです。“**俳句の里亀田**”なんて大きな顔をできなくなる時代になってきています。新潟市は昭和 16 年、昭和 44 年、それから四十何年たった現在からしても、大体 28 パーセントから 30 パーセントの人がとられているということで、やはり文化レベルから言うと、亀田はまだ非常に下なのです。熱心な人はいますけれども、本当の意味での俳句のきちんとした勉強のしかたをしていない。何となく俳句を作るというもともとそういう気風があるのではないかと思います。

それはしかたがないのでしょう。しかし一昔前の人たちが立派なのは、こういう先生方について、昔の小学校、高等小学校を出た人たちが、全国誌の中で立派な句を作って成績を上げていたことです。今後果たしてというより今、そのような成績を上げられるかどうか非常に疑問なわけです。一生懸命作っているのでしょうけれども、どうも質的な落ちは否めない。



昭和 13 年 5 月亀田通心寺にて

昭和 13 年ごろは先生方も一生懸命でしたが、軍平さんや白頭さん、先頭さん、豚春さん、魯郎さん、田中憲二郎、仙石先生は非常に成績が良かった。(プロジェクターの写真を指して)私たちをいじめたのはこの先生とこの先生です。これもいじめられなければもう少し上手になったのかと思いますが、もう委縮してしまいまして、句会に出るのがおっかなくて、とにかく大声で怒鳴られるわけです。学生と先輩では、意気地ない話ですけれども、医者の世界というのは口答えができないのです。技術的、知識にも圧倒的に違いますから、どうしようもないのです。俳句のほうは違うのだとは言いたいのだけれども、やはり俳句のほうでも下手は下手で、そういうわけにもいかなかったのであります。

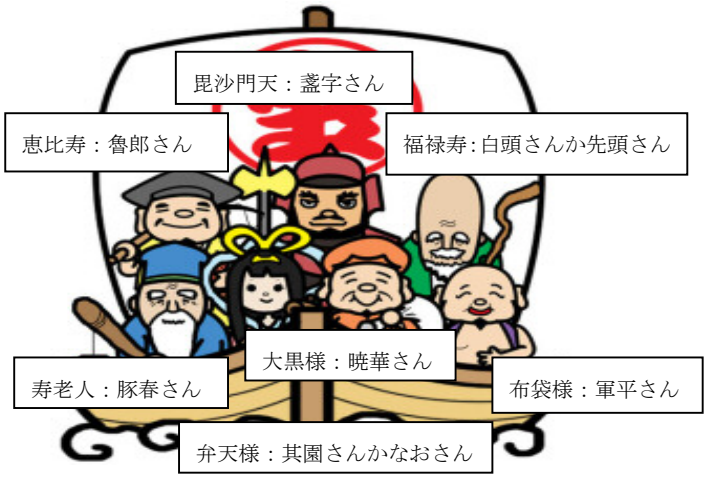
私が接した人はここの写真の中にだいぶいるのです。ただ、早く亡くなった大島兎月（とげつ）という、今の関川村から来ておられた、非常にいい句を作られた方なのですが、この人は早く亡くなられました。現関川村長平田大六さんの叔父さんです。この方には会っておりませんが、魯郎さんとは患者としても会っています。軍平さんなどはあまり接触はありませんでしたけれども、暁華さんとか豚春さんなども私は主治医として、大変いい患者でありました。

豚春さんは、何でも秘密にできない人なのです。耳が遠くなりまして、死ぬ前になって、先生にしか聞かせないようにしようと思ってこそこそ言うと、大きな声で「なにや」なんていって、看護婦がびっくりして飛んでくるような声を出す人でした。戦後、後に農協の理事などをやっていた佐藤南瓜（なんか）さんとかその本家の佐藤稲舟（とうしゅう）さんといった予科練あたりから帰ってきた人たちを、豚春先生は上手にリードして、戦後の「まはぎ」を支える人たちを作ってくださったわけです。学校の教師としても立派でした。

坂井魯郎さんという方がいるのですが、この方も学校の先生ですが、やはり学校の先生はそういう点では非常にうまいです。医者などが教えるよりずっと上手に俳句を教えてくださるのです。その跡を引き継いだのが渡辺信一さん、亀山其園さん、田村山火（さんか）さんでありますが、これはまた後でお話ししますけれども、亀田を全国レベルの非常に高いレベルに引き立てるのに頑張っていたということです。それもやはり昔から虚子に通じる大きなパイプ、素十、みづほ、今夜といったパイプでうまく虚子に情報が伝わっていることが大きかったように思います。

亀田の七福神

「まはぎ」の 10 巻ですから、昭和 13 年の 9 月号に、籔の神主という、これは玉木豚春先生ではないかと思うのです。籔の神主という筆名で「亀田七福神」という文章が載っているのです。それを読んでみますと、面白いことが書いてあるのです。亀田で一生懸命に俳句をやった人たち、軍平さん、先頭さん、盞字さん、暁華さん。このときに其園さんがちょうど俳句を始めたころなのです。まだ「ホトトギス」にはゼロの時代ですけれども、そして豚春さん、魯郎さんと、この二人が教師があった時代であります。ここにこういうことが書いてあるのです。



「亀田七福神というか船戸山の七賢というか、とにかく俳句が飯よりも好きで、訪ねて行けば、田んぼの仕事をそのままにしておいても、吟行に加わるという連中が七、八人いるのである。軍平さんはどう見ても布袋様であるし、豚春さんは寿老人ということになる。魯郎さんを恵比寿様とすれば、大黒様は、暁華さんとなる。白くない、大いに黒い大黒様で、笑顔も煤けた大黒様としてふさわしい。米俵に座ったり芋俵に座ったり自由だ。毘沙門天はどうしても盞字さんをもってこねばならぬ。おみき（神酒）が好きで右肩をいからし大声でわめくところ、どうも他の福の神にはふり当てる余地がない。福禄寿というのは白頭さんか先頭さんでももってくるよりほかないが、どちらにしても大して福々しいとは申しがたい。（中略）とにかくこの七福神が賽の入船というので乗り込む舟は、真っ黒な染め汁のながるる堀にいくつでももや（舫）ってある田舟が控えているから心配はない。」

田舟などというのはご存じの方は少ないと思いますけれども、昔の小さな船です。稲を運んだりするのですが、そこに乗ると。きれいな宝船に乗るのではなくて、たぬきの泥舟に近いようなものに乗るのだと。またつづいて、

「場合によってはひとりびとりに一艘づつ田舟を提供してもよい。これら七福神が、そろって夏冬をえらばず大きい炉をかこんで俳句を論じ、雑詠入選にしのぎを削る有様は天下無類であり、福来ること間違いのないなごやかな景色である。」とあります。

「まはぎ」の 10 巻 1 号で 9 月号ですが、昭和 13 年にこの一文が出ています。

今は女性が句座の 90 パーセントを占めますけれども、昔は本当に女の人はいないのです。女の人が一番多くいたのは、大学の看護婦も入っていた新潟医大句会です。ほかは今のように女の人はほとんどおらず、非常に少なかったのです。それで、器量が悪かったけれども其園さんが七福神の弁天様になったわけです。彼女を美人だと言ったのはこれが初めで最後だったのではないかと思いますけれども、非常にいい人柄の女性でした。

この七福神の中の佐藤暁華さんというのは「まはぎ」ができたころからの人でありまして、昭和 48 年に亡くなられますけれども、佐藤念腹などと一緒に「まはぎ」に非常に貢献された方であります。暁華さんの家は今はもうだれも俳句をやりませんけれども、せがれの仁也さんという方も非常に一生懸命にやったのですが、この方は途中から政治のほうに頭がいってしまって、あまり俳句をやらなかったのです。晩年に復帰されまして、『車いす』という句集を遺されました。船戸山会館の前に暁華さんの有名な「**足底の水がつめたし深田植**」という句碑がございます。これは亡くなってからできたのですが、『夏炉』という句集がございます。非常にいい句集で、この人は亀田の農家の中では学者でした。勉強をよくした方で、七福神の白頭さん、軍平さん、先頭さんに夜学で基礎的な勉強を教えておられたのです。

船戸山会館前の

佐藤暁華の句碑

高浜虚子が作った歳時記の古典とも言える『新編歳時記』というものがございますけれども、この中に暁華さんの句が 4 句ほど載っております。こういうものに句が採用されるというのは、よほどでないと載らないわけです。全国何十万、何百万という中から選ばれるわけですが、載っている句としては、「**先を行く藁長靴の嫁の母**」という、今では藁長靴などはありませんけれども昔の姿を伝えています。それから、「**よろこびの大夕立に水仕かな**」、「**鴨食といはれし字の深田打つ**」と。鴨をとって食べてしまうという句と、「**種選るや妻聞き出せる雨の音**」という 4 句がこの歳時記に載っているのです。この歳時記も改訂されたりしています。間違いもちょいちょいあるのですけれども、こういう歳時記に載るというのは、俳句をやる人には非常に名誉なことであります。

円満寺境内の虚子、みづほ、

素十、今夜の句碑

晩年、暁華さんはよく地蔵様を描いてくださいました。私の患者で、よく腰が痛いとか何とかと言って来られたのですが、昭和 48 年に 81 歳くらいで亡くなられました。老衰みたいなものであります。暁華さんのところに大きな炉がありまして、“暁華の炉”ということで、虚子がここに訪ねたときに、夏だったのですが、

おそらく火が消えていて、「**夏炉の火もえて居らねば淋しくて**」という句を遺しています。これが今、円満寺の句碑の中に残っておりますけれども、虚子にも詠まれた“暁華の炉”です。ここによく集まって、学校の先生たち、大学の先生が来て話をされたのです。素十先生などは来られて、暁華さんが自分の奥さんを呼ぶのに「かか」と言うものですから、素十先生も奥さんを呼ぶときに「かか」と。そうすると、奥さんはぷんとして相手をしないのです。「どうしてだろう」と素十先生がほかの人に聞いたら、「先生、かかと言わないでおかかと呼びなさい」とたしなめたんです。それで「おかか」と呼び直したら、その後はきげんよく返事をしてくれた、というエピソードがあるような炉だったわけであります。

寿老人の玉木豚春さんですが、この方はもともと会津の山奥のお医者の出なのですけれども、暁華さんより少し若くて、明治 28 年の生まれですが、新潟師範学校を出て亀田の小学校に昭和２年に来て、五泉の小学校の校長をされたりしたのです。その後、昭和 22 年から昭和 27 年、早通小学校の校長もされました。若い青年たちを鼓舞して、俳句趣味を持たせたということでは大変な功労者であります。その弟子たちは少しは生き残っている方もおられるかと思いますが、戦争に行った青年たちを戦後いい方向へ導いた。この方の句碑は諏訪神社にございますけれども、「**豊年の田に一礼し刈りはじむ**」という、非常に名句であります。それから、滝谷の慈光寺にも句碑が一つございます。滝谷の慈光寺に参るときに杉林の中の左側に一つあります。横越の小杉の松韻寺にも「**羅漢樹や寺歴七百五十年**」という句があります。それから、東蒲原郡阿賀町の山奥の馬取というところの宝来寺に、「**山々々山々々や天高し**」という句碑があります。『拈華』『微笑』などのよい句集が残っています。

諏訪神社脇の

玉木豚春の句碑

３番目の渡辺軍平さんですが、はじめは江舟という俳号だったのですが、あとで軍平になりますけれども、明治 29 年に生まれて昭和 43 年に 72 歳で亡くなりました。この方は虚子の『新歳時記』の中に３句載っているのです。非常に虚子にも注目されていたのです。「**寝正月ート笑ひして起きにけり**」という句が載っております。それから、「**高撥（たかはご）に今日面白くかかゝりけり**」というのと「**高撥にせはしく鳴いてかゝりけり**」という２句があります。たかはごという、今はほとんどないのでしょうけれども、鳥をとる道具です。

本当に天真爛漫といいますか、好きな人がいたのですけれども、親に反対されて結婚しないで、両方とも結婚しないで死んでしまったという、非常にロマンチックな傘張りの職人でありました。あとで日雇いか何なりになりました。良寛のように、なんか屋などから飴などを買ったりして小さな子どもとよく遊んで、いつもにこにこしていた方であります。私は死

ぬ前に少し会ったきりでしかないのですが、湯豆腐とお酒が好きだったらしいです。たしか２月の立春の日が命日だったと思いますが、素十先生が「**あはれなり立春の日にみまかりし**」という弔句を贈っています。こういう先生が弔句などをくださるということはめったにないのです。「**立春の日の仏たり忘れめや**」というみづほ先生の弔句もあります。みづほ先生は弔文を「まはぎ」に書いているのですが、本当に良寛みたいな男であったと書いてあります。通心寺にお墓があるのですが、直径 50 センチくらいあるでしょうか、球の石のつるつるしたお墓があるのです。そういった人でしたが、残念ながら句集はないのです。

亀田排水路公園の

亀山白頭の句碑

先頭さんも七福神の一人ですが、「まはぎ」の初めからいた人です。どうも胃が弱くて早死にされたのですが、明治 38 年に生まれて昭和 31 年に亡くなられました。この人の句も虚子の歳時記に２句ほど載っております。「**蛭とべぬ子は龍持や芹を摘む**」、「**鉢巻を締めなほしたり昼寝ざめ**」と。これは五頭のやまびこ通りに句碑がありますが、これも虚子の歳時記に載っています。この弟さんが白頭という人で、これは頭が白かったから白頭といいました。その妹のなおさん、最近まで生きておられまして長命でございました。この白頭さんという方の句も、亀田の句碑の道に、「**籾摺の唄を唄ひし頃の白**」という句碑が残っております。

坂井魯郎さんという方ですが、これは亀田の小学校の教師をしておられたのですが、その後白根に移られまして、亡くなられました。亀田の我々整形外科の後輩の先生などもみんなこの先生にもたれたということで、最後はやはり医大で亡くなられました。片目にあざのようなものがありまして、いつでもおかしな顔をしておられたのをよくおぼえています。

亀田排水路公園の

樋口盞字と堀内麻子の父娘句碑

毘沙門天の樋口盞字さんですが、この方の娘さんが堀内麻子さんということで、子どもさんとの父娘句碑がございます。この人は非常に正義感が強くて、酒にも強かったのですが、戦中、戦後、米の供出があって、供出を拒否したりしますとすぐに刑務所に入れられたのです。本当に今では考えられない時代があったわけです。政府というのはそういう点では本当に暴力団と似たようなもので、言うことを聞かないやつはすぐにとっちめるのです。供出に反対して刑務所へ入れられてしまったのです。そのころの大学教授というのはやはり偉かったのですね。みづほ先生と素十先生がときどき盞字に酒を飲ませてやろういうわけで、刑務所勤務の教え子の医者がいますから、それに命じて、病気だから大学で診察しなければだめだということで、監視をつけて大学に連れてこさせるわけです。そして、教室で手錠をはずし、１日法医学教室に行ったり外科教室に行って酒を飲んだり、

こたつに入ったりして、帰りに、薬だと言って薬びんに酒を詰めて刑務所へ持たせて帰らせました。そういうことを大学教授はできたのです。今そのようなことをしたら大変なことになるのですけれども、昔の大学教授というのは偉かったのです。

それからすると今は全く権威と力がなくなりました。俳句というのは面白い仲間ができるのです。私が教授だったらやはりそういうことをしたかと思います。主治医が酒を禁じましても、俳句の人で酒を好きになると、私なども見舞いに行くのに薬びんに酒を入れて行って飲ませたり、がんセンターで随分そういうことをやりました。それはやはり私の師匠のみづほ先生や素十先生がやったものだから、師匠のやっていることはいいことだと思って真似をして私もやったのです。そうしたら３日目に亡くなった方もいまして、俳句の仲間というのは大変面白いです。

そういう点では、身分とか社会的なことは関係なく、同じレベルで付き合いができるというところがあるのです。だから、俳句をやらないやつは私はばかだと思うのです。私たちでも、「玉藻」という会に行くと、三笠宮殿下が会員だったり、渡辺淳一なども来ます。渡辺淳一は同じ整形外科の医者ですけれども、一緒に話をしたりできるのです。ほかの人たちもいますけれども、私ももともと心臓は強いですから、三笠宮殿下が 91 歳くらいのときでしたか、お会いして俳句の話をしたりします。また妃殿下も俳句をやられるのです。妃殿下のほうが上手なのです。旦那さんはへたくそです。大体俳句をやると奥さんのほうが上手になって旦那がへたなのです。例外もありますけれども（笑）。

弁財天は其園さんですけれども、この人は結核という病気があった。その療養の間に俳句を始め、先頭、白頭、軍平という人たちと交わりがあり、同じ傘張りの仕事でした。大きな“其園の炉”とよばれる炉がありました。傘張りをやめてからお茶売りをやりまして、お茶の行商などをやっていたのですけれども、小さな炉になってしまいました。これは“一斤の炉”という名前がついていました。女流がいっぱいになったのは其園さんに大きな力があったのではないかと思います。「一斤の茶を買えば半日この炉にいてよい」という素十の色紙をかけていたからです。亀田の町で、旦那さんを会社に送り出してしまった暇な人が集まって、女性を主とした「粽（ちまき）句会」というものを作りました。それが大きくなっていったのが、現在、亀田あたりの女流の基だと思います。それが彼女の大きな功績だと思います。これを助けたのが荻川出身の長谷川耕畝（こうほ）という人と、亀田第一病院の渡辺信一先生が陰になって力を貸してくださったのだと思います。其園さんの妹の友江さんという方も俳句をやっていましたが、あまり長くは続けなかったようです。

亀田排水路公園の

亀山其園と小木友江の姉妹句碑

『花太藺（はなふとい）』という、亀田の人たちの句をまとめた句集を其園さんがまとめました。これは大きな仕事だと思います。自分自身も俳句を作るのですけれども、いろいろなものをある時期にきちんとまとめるという仕事はリーダーとして大事な仕事なのです。そういうことをやる人が亀田には非常に少なかった。暁華さんもやらなかった、先頭さんもやらなかった、白頭さんもやらなかった、豚春さんもやらなかった。しかし、其園さんが『花太藺』という、過去の写生俳句の人たちのものを、小さな本ですけれどもまとめた。これは近代の亀田の俳句の全貌を知るうえで非常に大きな業績だと思います。俳句をやるうえでこういうことを誰かがやらなければならないのです。最近この続編『続花太藺』が田村紅子さんが中心になって刊行されましたのは立派なことでした。

それを陰でサポートしたのが田村山火さんという亀田の教員でおりました。中蒲原郡の旧鷲巻村出身の方ですが、信一先生の黒子になってやってくださったのです。73 歳くらいで亡くなりましたけれども、その奥さんが紅子さんです。亀田へ来て俳句を作る女房をスカウトしたというのも一つの業績だったと思います。夫婦句碑もできています。今はとても年寄り同士で，一緒になるなどということはできませんけれども、昔はそういうチャンスもあったわけです。

亀田排水路公園の

田村山火と田村紅子の夫婦句碑

私はそういうチャンスがなかったから残念でしたけれども、信一先生という俳句気違いの医者と会うことができました。私の仲間が酒屋にハイ病専門の医者がいるというのです。そんな療養所もないのにそんな人がいるかなと思ったら、酒屋にいたのは「俳病」の医者なのです。玄関口に俳句を投句する箱が置いてあって、どこへ行っても俳句を勧める医者なのです。非常に熱心で、奥さんのテイさんという方はまだ生きておられて、このごろは作られませんが、俳句をやられていました。渡辺信一先生は体は小さいけれども肝っ玉は大きいのです。今の亀田第一病院の基を作った先生です。そういう先生を手本に高橋向山（こうざん）という人や樋口南盆（なんぼん）、渡辺水風、佐藤仁也、五十嵐渡河（とが）、佐藤南瓜、佐藤稲舟、窪田梨人（りじん）、窪田竹舟（ちくしゅう）といった人たちが俳句をたゆまずやる環境を作ってくださったのであります。そういう点で、この先生の業績は立派なものだと思います。

亀田排水路公園の

渡辺信一と渡辺テイの夫婦句碑

みづほ先生が亡くなり、「まはぎ」が昭和 50 年 11 月に 533 号で廃刊になるわけです。その後の雑誌を作ろうということで、村松紅花（こうか）という東洋大学の先生を撰者にして「雪」という雑誌を作ったわけです。それが途中でほん投げられて選者をやめましたものですから、

私が引き受けました。昔はもっと厚かったのですけれども、こういう雑誌がいまだに続いています。今年の 12 月で 435 号になるわけです。それの子どもの雑誌ということで、「小雪」というものができました。これも信一先生がやられたのです。その後、家田小風（しょうふう）という人がやられたり、今、安田充年さんと田村紅子さんが「鷗」という俳句雑誌をやっておられます。これも来年の１月で 100 号になると思いますが、亀田に事務所を置いております。残念ながら、先ほど申しましたように、若い人は入らない。恐らく俳句とか和歌というものは衰微する文芸だろうと思います。短詩型文芸の中で残るのは、私は川柳だけではないかと思います。川柳というのはだれでも作れます。ばかでも作れるのです。文字をばらまいて組み合わせてもできるわけです。そう言っちゃ悪いんですけれども、わけの分からないことを言っていても川柳になるわけですから（笑）。

江南区の主な句碑

過去の業績がまとまったものが亀田排水路にできた句碑の道であります。樋口南盆さんとか田村山火さんとかそういう人たちが一生懸命運動をやられて、いろいろな句碑が残っています。やがて 200 年、300 年たつとまた道路を造るとかいろいろなことでなくなってしまうかもしれませんけれども、当分の間は大丈夫なような気がいたします。これは亀田の人しか建てられないという規則があるらしいのですが、上手なものもあればへたくそなものもあるのですが、一応残っているわけです。そういう点で、句碑が町中にまとまってある町というのは非常に少ないのです。

亀田排水路公園

五頭のやまびこ通り

阿賀野市の旧笹神村に“やまびこ通り”というのがあって、ここは俳句の墓場みたいですが、今 300 くらいありますけれども、あれもどうなることか分かりません。行ってみますと、本当に俳句の墓場というような感じがいたします。みづほ・素十・今夜先生のものもありますし、ずらっと並んでいます。毎年１回ずつ、除草のボランティアといって、建てた人が行って草取りしなければならないことになっているのですけれども、だんだん年をとってきまして、だれも行かなくなってきます。やがてこれは阿賀野市の負担になって、今でも負担になっている

五頭のやまびこ通り

みづほ，今夜，素十の句碑

のだと思います。このスライドのようにみづほ，今夜，素十の句碑が３基並んでいます。これは肉筆ですけれども、肉筆でないものもあります。田中角栄の歌碑などもありますけれども、あれは田中角栄が作った歌ではなくて、若山牧水の歌を自分で書いたという。それで角栄と書いたのです。政治家というのは本当に厚かましいですね。一度やまびこ通りに行って御覧になったらわかると思います。

排水路公園の句碑はしばらくの間は亀田の町の名物になりますが、ここには虚子も来ていますし、素十、みづほ、今夜、仙石というような功績ある方がいますから、そういう方の句碑も建ててやると全国的な価値が出てくると思うのです。亀田の地域性というのは大事なことでありますけれども、もう少し視野を広げますと、もっといろいろな観光的とか、文芸的な知名度の広がりが出てくるものですから大変良いことだと思うのです。土地をもっと広げなければならないとかいろいろな問題が入ってきて難しいと思いますが、やはり一つの文化財として、早く建てた方が得するようなことだけになってはちょっと淋しくなります。

その当時のよき時代の風景を、亀田図書館長が苦労して作られたビデオがありますので、ご覧になっていただきたいと思います。

（ＤＶＤ鑑賞）

江南区の主な俳人たちや中田みづほ，浜口今夜，高野素十，及川仙石先生たちが，亀田近郊の農村地帯で俳句の吟行会を行った様子などを映したＤＶＤ（戦後間もないころの８ミリフイルムの映像をＤＶＤ化）を鑑賞。

亀田図書館を俳句の情報センターに

この江南区は排水路に最も多く句碑があるのですけれども、約 30 あります。歌碑が４基あります。横越のほうにも阿賀吟社の人たちの句碑もあります。早通から丸潟等にもありますが、大体分かるところでは、50 人くらいの近代の句碑があります。まだ調査していないのですけれども、新潟でもそうですけれども、お墓に辞世の句や追悼の句を彫ってあるものがよくあるのです。これはまだどこでも十分に調査されていないのです。

亀田や横越地区に 50 人くらいの句碑がありますが、今日の配布されたパンフレットの中にはまだ載っていない人もいると思いますので、皆さん方、またありましたら館長さんにお知らせ願いたいと思います。特にお墓に俳句が刻まれているものがあったりしたら、どこにあるということを館長が在職中に教えていただくと、立派なものができあがると思います。一人の者ではなくて、みんなが協力して、せっかくここがセンターのようにしてあるわけです

から、ここへ情報を送っていただきたいと思います。亀田の図書館が新潟県の俳句の世界の中で一つの情報センターになるような、俳句資料の宝の倉庫の役目を果たしてもらいたいと私は思っています。この図書館を俳句の特色を持った図書館にするというのは非常に賢明な策だったと思います。恐らくこの伝統はずっと続けられてくるものではないかと私は思っています。また、続けてほしいと思っております。皆さん方のご協力をこれからも、生きている間していただきたいと思います。

私はもうあと何年生きるか分かりませんけれども、とてもそう長くは生きられないと思いますし、時間がありませんし体も動きません。昔であればすたすたと歩けたのですけれども、今では椅子から立つのに「どっこいしょ」と言うようになってまいりましたが、皆さん方が力を合わせれば、１の力も 100 人いれば 100 の力になるわけであります。そういう点で、これを機会にこのセンターを十二分に利用して、そしてお互いの人間的交流なり何なりを十二分に発揮いただければ、いま地下に眠っておられる亀田の俳句関係の先輩方も喜ばれるのではないかと思います。私もできる限りきちんとしたものをまとめておきたいと思います。

先ほど申しましたように、平成８年に県内の俳句のあゆみの足跡を一応はまとめたのですけれども、まだ非常に粗雑なものですから、これをもっときちんとしたものにしていきたいと思っております。まだいろいろ申し上げたいのですが、時間もありませんし私の体力もそろそろ限界でありますから、この辺で責務を終わらせていただきたいと思います。

俳句というものは世界に類のない非常に短い、面白い、しかも奥深い文芸であります。これを何とか後世に伝えていってほしいものだと思います。今は老人ばかりで、このままでいくと 15 年くらいしたら亀田で俳句をやる人がいなくなってしまうのではないかと思います。しかし日野原重明さんのように百いくつまで生きていればやれるかもしれませんけれども、どうか、虚子が言ったように、最後まで正しい俳句が残る土地にしていただきたいと思います。それは皆様のお力によるものであります。今日の話が多少の参考になれば、私も幸いでございます。非常に長い間、つまらない話をしましたけれども、これで勘弁していただきたいと思います。どうもありがとうございました。

【巻末資料】

資料１　講演会レジュメ

資料２　「江南区の主な句碑一覧表」

資料３　講演会のチラシ

資料４　展示会の看板

資料５　講演会の様子（参加者 61 人）

資料６　展示会の様子（特別コレクション室）

資料７　参考文献

巻末資料

資料１　講演会レジュメ

亀田図書館新築移転1周年記念事業

「江南区の主な俳人たち
―思い出ばなし―」

俳誌「雪」主宰
元新潟県立がんセンター新潟病院副院長
蒲原　宏氏　講演会

平成25年11月10日（日）
午後2時～3時30分

新潟市立亀田図書館主催

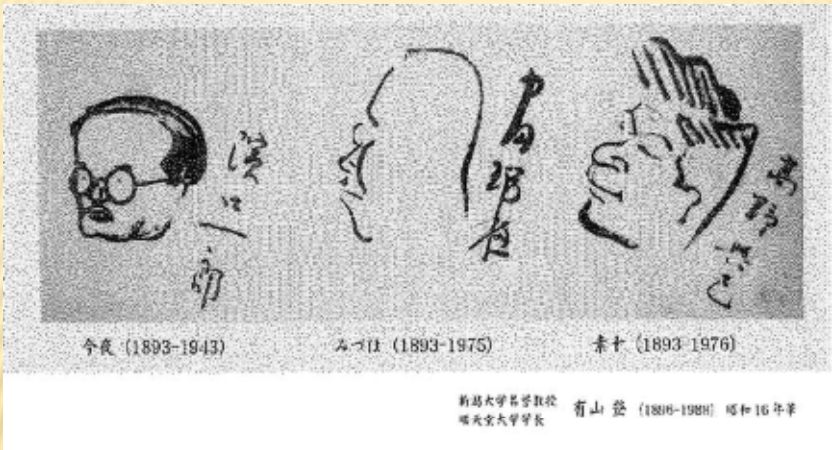
目次

一　中田みづほ・高野素十・浜口今夜・及川仙石生誕一二〇周年について

二　江南区の主な俳人たちについて
・農村風景と句会の様子

三　句碑について

一　中田みづほ・高野素十・浜口今夜・及川仙石生誕一二〇周年について



「新潟ホトトギス」三羽烏

二　江南区の主な俳人たちについて

農村風景と俳句吟行会の様子

句会の様子と農村風景

高野素十　中田みづほ　高浜虛子　及川仙石　高浜年尾　浜口今夜

亀田通心寺にて
（昭和13年5月19日）

三　句碑について

亀田　排水路公園

五頭　やまびこ通り

新潟護国神社にて（昭和25年6月1日）

新潟玉藻会俳句大会

江南区の主な句碑一覧

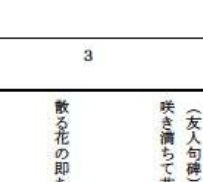
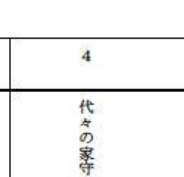
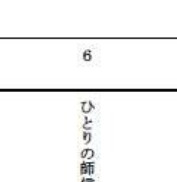
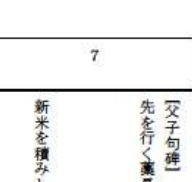
（未定稿）

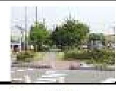
新潟市立亀田図書館作成

平成25年11月10日

一　亀田排水路（上部施設）公園句碑（歌碑も含む）一覧（江南区船戸山～西町～緑町）

※ブロックNo.は亀田市民会館側から順に公園を道路で区切った区画番号

ブロック	No.	碑文	作者	解説	写真
A	1	（夫婦句碑） ちよと脇見すれば田植機ちよと曲り 恥じらひの白き腕や闇夜汁	佐藤　南瓜 佐藤　幸子	【素十先生句評】「私は田植機といふものを見た事がない。此の句から或る程度、想像することが出来る様に思う。ちよと「脇見」と云う風に「ちよと」重ねて用いたところが風景をよく現してゐる。如何にも軽妙である。」 気の置けない仲間が集まって座興に行う会食で、各自が持ち寄った品物を明かりを消した闇の中で、鍋に入れて煮、暗中に食べる。思いもかけぬものが箸にかかったりするのを楽しむのである。	
	2	（父子句碑） 御降りの炉に稲作り梨作り 神棚の梨あげ替へて年迎ふ	窪田　梨人 窪田　竹舟	「御降り」元旦に降る雨か雪のことを言います。昭和二十六、七年頃の作です。当時家では大きな茅葺きの家で、茶の間には大きな“ほた”を焚く炉がありました。元旦の入れ替わり、来られる年賀の客が梨専門農家や米作りの農家であったりし、昨年の米や梨の出来の話をしていたものです。 お盆になると梨作り農家の神棚には初もぎの梨があげられております。又、秋になると特別大きな梨や珍しい品種の梨などがあげられております。正月を迎える暮れの大掃除では、特別の意味はないが、新しい梨にあげ替えて新しい年を迎える梨百姓の心情を詠んだ句です。	
	3	（友人句碑） 咲き満ちて花の静けさありにけり 散る花の即ち花の別れ哉	福嶋　道子 草間　れい子	全精力を傾けて咲いた桜の吐息といいますか、咲極まった桜の充足感の安らぎを詠たかったのです。これは平成十一年八月号「雪」選者、村松紅花先生選の中の一句でございます。人の世の生き様にも似てと思って桜の美しさを重ねて詠いました。 懶漫と咲き誇る桜はこの上なく美しく大好きですが、時が経てば花吹雪となって散っていく。即ち花同士もお互い別れていく運命にある。会うは別れの始めと言われる通り、生を受けたものは必ず死ぬという永遠の別れがあることを、散る花を眺めながら考えさせられ作句したものです。	
	4	代々の家守木にして蝉時雨	佐藤　稲舟	この句は船戸山の代々の家守木として詠みました。句碑の裏側に発行所が亀田にある俳誌「雪」の選者、村松紅花先生に依る入選句評を記しております。	
	5	水盗み盗まれながら稲の花	樋口　南盆	出穂間近だと言うのに、毎日カンカン照り。そんな季節になると水争いが絶えなかった。夜通しかかって引いた隣田の水を、畦に穴をあけて盗む。又その水を盗み返す。そんな争いをよそに、季節が来れば穂を出し、花を咲かせて実を結ぶ。自然の摂理はよくしたものだ。	
	6	ひとりの師信じ涼しく月仰ぐ	高橋　向山	俳句のような文芸では何人かの師に同じ句を見てもらっていては、ある人は探り、ある人は探らないというとが起こり、自分の道がわからなくなる。一人の師を頼るしか道がない。一人の師で満足して月を仰ぐというのは、涼しい心境である。	
	7	【父子句碑】 先を行く裏長靴の線の母 新米を積みし炉の火の赤々と	佐藤　暁華 佐藤　仁也	解説なし 解説なし	
	8	苗賣ひ来て苗代の賑やかに	浅井　八郎	私は水苗代で助合乍ら行ったり来たり賑やかでした。私は亀田生まれで亀田小学校卒業。自宅で大勢の若い衆と賑やかに苗賣いをいたしましたが、現在ビニールハウスに育苗しております。	

ブロック	No.	碑文	作者	解説	写真
A	9	米倉の軒の田舟や水温む	小嶋 健一	私がまだ幼かった頃、昭和三十年代前半、もう田舟は使われなくなっていたが、村の縦横に水路が残り、米倉には田舟がある。そんな思いを浮かべて、その頃の懐旧の念を「水温む」という季語を用いて詠んだものです。	
A	10	（歌碑） 町挙り老いも若きも集う夜に岩万灯の木遣りは響く	南場 愛子	年一回の大祭礼のこの日は、遠くにいる親類・縁者から近郷近在の人々まで大勢集まって見物します。その岩万灯の押し合いの始まる前に木遣り音頭が威勢よく響きます。とても感動的な場面です。	
B 	11	出穂水の足りて潟村午睡刻	坂井 要一	稲には初期生育と出穂の時期に一番水が必要とされる。特に稲の穂の出る頃に十分な田水が必要だが、その水も足りて安心。潟村は今しんと静まり昼寝の時刻に入っている。そんな時に詠んだ句です。	
	12	堰とめし水の高さの水馬	五十嵐 渓河	二十三年頃高濱虚子先生が亀田へおいでになられ、その折の句会に運良く先生の選に入り、激賞されたと申しておりました。日曜になると亀田へ吟行に来ておりました主人は、用水などをあちこちで見てたと思います。堰とめたその水に、水馬が元気で遊んでいる様子を詠んだものと思います。	
	13	この下に産屋妻をり雪下す	大野 一路	昭和二十年代、三十年代は雪が多く降り雪下ろし、雪掃てに大変苦労した。病院で出産など出来ず、家で出産した。子供の泣く屋根の雪下ろしをしている時の俳句。なつかしい思い出の一句です。	
	14	雷転げ転げ潟村雪降らす	鈴木 新一朗	潟の名のつく村、すなわち亀田からはなれた奥在郷、今は面影はないが、我家の裏には面潟（早通潟）があり松蓄があり、そこを冬の雷が走り、雪を連れて来、暗く重く空さびしくそこに生きて来た先人たちは、恐らく楽な生活ではなかったと思う。	
	15	（夫婦句碑） 登山靴油濃くぬり年惜しむ	田村 山火	季語は「年惜しむ」で、この一年も残りわずかになったという感慨である。山岳会の合宿は正月・春山・お盆の三回であり、正月合宿に備えて登山靴にしっかり油を塗りながら、一年を振り返りつつ来たるべき新しい年に期待をこめている句意である。	
		蝶白く輝き遊ぶ花野かな	田村 紅子	季語は「花野」で秋の句です。排水路の公園に吟行して、いろいろの花の咲き乱れているところに、白蝶が楽しそうに飛び込んでいる美しさに魅かれて出来た句です。	
	16	（父娘句碑） 稲舟を漕ぐ正面の月となり	樋口 遷子	区画整理前水田の刈稲を舟に積み、船戸山排水路を稲舟を漕いで日没まで働いた当時の農村の労働の様子の俳句です。	
		一亭の蛍まつりと云ふ闇に	堀内 麻子	何々祭りといえば花火を上げるとか、提灯を懸けつらねるとかするものですが、蛍まつりだけは明かりが大敵である。客のための一亭があるが、それは闇の中だ、という事を俳句に詠みました。	
	17	（歌碑） うららかに草木のつぼみ光る道 以久たび人に越されつつ往く	塩井 三作	四月上旬の散歩の時の歌。道の両側にいろいろな草木が春の勢いを見せてくれるので、それらに見とれていると、後ろから来た人がつぎつぎ私を越して行く、という意。	

ブロック	No.	碑文	作者	解説	写真
B	18	稲雀越後の空に力あり	小暮 洗車	豊かに実った越後の稲田の空をおびただしい雀の群れが力強く舞い遊ぶ。この豊かな故里の自然のたたずまいが、永久に続けかしと祈るや切。	
	19	（歌碑） 落葉焚くけむりが里に たなびきてうすむらさきに弥彦山見ゆ	佐藤 千代子	広い広い田んぼがどこまでも続き秋の刈入れも終わってのどかな午後、里の森から落葉たく煙がゆったりとたなびき、はるかに見える弥彦山が、うす紫にかすんで浮かんでいて、何ともおだやかな晩秋の一時を詠みました。	
	20	（歌碑） 長き冬を耐へし想ひか 木蓮は白きほのほとなりて噴き上ぐ	岩瀬 房枝	二十年ほど前、船戸山の藤田権六どんという旧家の前を通った庭、木蓮の樹に花が開き、あまりの見事さに思わず感嘆の声を上げました。まるで白き炎と形容する以外に表現する事が出来ない程でした。	
C	21	祭りには泥鰌の鍋も亀田らし	窪田 桃花	亀田祭りになると何処の家でも泥鰌鍋が振まわれた物です。今は、泥鰌の大きな物はなく、食する事が少なくなった。泥鰌鍋を食べると郷愁が湧いてくる。	
	22	桐の花紺屋へ嫁ぎ五十年	高橋 桐子	私の家は紺屋撚糸機屋の三代目です。家の前に大きな桐の木が有り、初夏には薄紫の花が美しく咲きます。紺屋は止めましたが、いまだに"紺屋どん"と呼ばれています。	
	23	残月や砂丘へつゞく冬田道	佐藤 ゆう月	この俳句は、砂崩の晩秋から冬にかけて落葉樹が葉を落とし砂丘全体の景観が望めるときに、ありあけの月を詠んだ句です。	
	24	失植女一人の影を長く引き	田中 美津枝	ある日の農村風景です。田植えが終わると家族は早々と帰宅しますが、その後は苗の抜けている（失植といいます）所を植える作業をするそうです。女一人、夕日の落ちる頃、苗の失せた所を植えていると、西の空が夕焼て自分の影が長くなる。その光景になぜか哀れさを感じます。	
	25	日脚やゝ伸び夕空水色に	村尾 ひな	晴れた日の夕方、外出先から帰宅する時につくづく日脚が伸びたことを感じた。その時の夕空は水色でとても明るく美しかった。待っていた春もうすぐ隣まで近寄っている思いで安堵感もあった。その時の美しさを句に詠んだ。	
	26	（夫婦句碑） 往診の豆の花道田鰻の道	渡辺 信一	秋に自転車にてよく往診をして居りました。帰りに田道を通ると、豆の花が美しく咲きはじめ、また圃庭、稲の穂が出始めるのです。自転車を降りてその景色を眺めていると、何とも言われない心の豊かさを感じ、此の句をしたためました。	
		風花や触るるともなく木々の芽に	渡辺 テイ	春、季節の変わり目は三寒四温と申しましょうか、時に冷たい風と共に、小さな小雪が降ることがあります。圃庭木々が芽吹く時に、その風花がはらはらと降る情景が私の庭に見られますので、ふとこの句が浮かびました。	
	27	（姉妹句碑） この夏炉虚子と囲みし昔恋ふ	亀山 其園	高浜虚子先生が自宅においでになった際、俳句大会があり、炉を囲んだ時の俳句。	
		渋蟹の並びしあたり石蕗盛り	小木 友江	解説なし	

ブロック	No.	碑文	作者	解説	写真
C	28	紫を絞るや雨の花菖蒲	岩崎　夕子	亡くなった妹の四十九日の法要の日は雨でした。庭の隅の紫の花菖蒲に降る雨が妹の涙のようでこの句を作りました。亡くなるまで一生懸命に俳句を作り続けた妹への思いです。	
	29	人通るところ残して小豆干す	柴野　静香	この句は私が用事にいった家の玄関までの敷地に七枚から八枚の菰に小豆がいっぱい干してあり、人がやっと通れるだけの通路しかなかった情景を俳句に詠んでみました。	
	30	水仙の土割る青き力かな	関川　テイ子	早春の日曜日に石山園芸センターに吟行に行きました。園はまだ雪囲いがしてあり、広々とした園は枯色一色でしたが、固い土を割って水仙の芽がぞっくり出ていました。青々とした水仙の芽はとても印象的で時期がくれば必ず芽を出すその生命力に感動して詠んだ句です。	
	31	こまごまと紅咲きの萩の雨上る	熊倉　静子	船戸山会館前庭に建っている。「足底の水がつめたし深田　植暁華」。この句碑の前に紅萩が寄り添うようにしなやかに喜び揺れて咲いているように私は見えました。夕べの雨上がり、祝うが如く良い天気で、その時の気持ちを祝い心で詠みました。	
	32	千両を添へて目出度き壱の重	古山　華	平成十二年元旦、重箱の包みを開き、おせち料理を並べた時に詠んだ句です。年の暮、今は亡き主人と共に夜更けまでかかり、正月料理の「錦玉子」を巻いたりした。そんな昔の事がふと脳裏をかすめ、重箱の隅に輝いている紅い千両の実がむしょうに愛しくなりました。	
	33	猛吹雪の舞台終りし如晴れし	佐藤　妙子	句会に参加した日のこと。烈しく吹き荒れていた猛吹雪が急に止み、ぱっと晴れた。それは恰も猛吹雪の舞台で吹雪の場面が終わったかの様に思われた。季語は猛吹雪で冬。	
D	34	籾摺の唄を唄ひし頃の臼	亀山　白頭	籾を籾がらと玄米に分けることを籾摺という。昔は臼を使った。仕事が単調なため、田植え歌を歌いながら仕事をしたように、籾摺も唄を歌いながら夜なべや朝起きをして仕事をした。臼は石臼よりも土臼が多かった。その頃の臼がまだ残っている。	

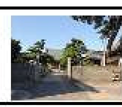
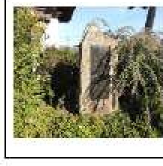
二　船戸山会館前の句碑（船戸山三丁目）

全景写真	No.	碑文	作者	解説	写真
		足底の水がつめたし深田植	佐藤　暁華	（碑陰） 誌 高野素十先生は、俳誌「芹」に 暁華は実によく働く百姓であり、 又炉を愛すること深かった。 田打泥桶に二つぶ炉の主　素十 と記されている。 暁華翁を写し得て妙である 茲に同志相計り氏の三回忌 を期し句碑を建立す。 昭和五十年七月 建立　亀田俳句会 後援　新潟俳句会	

三　円満寺境内の句碑（船戸山二丁目）

全景写真	No.	碑文	作者	解説	写真
		夏炉の火もえて居らねば淋しくて 草取に遠く牡丹の富貴かな 早乙女の夕べの水にちらばりて 燈台の三方の海てぐさ生ふ	高浜　虚子 中田　みづほ 高野　素十 浜口　今夜	（碑陰） 夏炉の火もえて居らねば寂しくて　虚子 高浜虚子先生は昭和十四年五月船戸山の佐藤暁華を訪ね、右の句を贈られた。虚子門高弟中田みづほ、高野素十、浜口今夜の諸先生が暁華の炉に遊び、写生俳句に励まされた。亀田に俳句が旺んであるのは、先師の指導のたまものである。茲に四師の句を碑に刻み、御恩の一端を謝したい。 平成三年深秋　佐藤仁也建立 亀田俳句会後援	

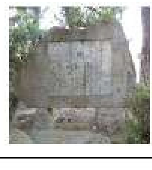
四　通心寺境内の句碑（船戸山三丁目）

全景写真	No.	碑文	作者	解説	写真
		幻の世に春雪の降ることよ	村松　紅花	（碑陰） なし	

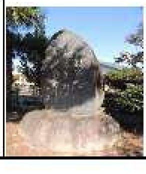
五　諏訪神社脇の句碑（東本町四丁目）

全景写真	No.	碑文	作者	解説	写真
		豊年の田に一礼し刈りはじむ	玉木　豚春	（碑陰） 昭和五十五年四月吉日 玉木琇三先生句碑 教え子心友句友建立	

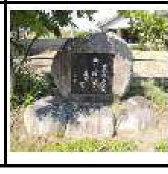
六　曽野木地区センター脇の句碑（天野二丁目）

全景写真	No.	碑文	作者	解説	写真
		ふるさとの稔りの秋を巡業す	寿々木　米若	（碑陰） 誌 寿々木米若　本名野上松平　曽川に生る。 長じて藤田家の人となる。 幼にして芸術に優れ、のち浪曲界の巨匠として、全国津々浦々にその名を知らる。 両親に孝養をつくし、常に身辺に招きて至らざるなし。晩年功成り名を遂げて 静岡県伊東市に隠棲す。遠く郷里に思を馳せ、郷党子弟の教育に意を用い、ことぶき保育園　曽野木小中学校等の建築整備に多額の私財を捐せらる。地区民深くその善意を感謝し、その徳を永く後世に伝えんとし、相図ってその碑を建つ。 昭和三十六年八月 新潟市長　渡辺浩太郎書	

七　木津地区研修センター敷地内の句碑①（木津二丁目）

全景写真	No.	碑文	作者	解説	写真
	1	（改善センター竣工記念　合同句碑） 業始め師のある限り轆の座 若竹や雲生み易き午後の嶺 鍬始め海から晴れて鳶の舞ふ 月見暮れてなおある水明り 田水沸く出穂どきを読むかいつぶり 忘れ鍬こと照らして夏の月 日向ぼことき揃ふ笑い聲 早苗饗や星座さだまる邑十戸 田水張って畦でしめる野鼠の穴 穀雨とか籾の生命を地にあづけ 百姓の減反地獄草茂る 老農の心痛める青田刈り 越後路は稔りゆたかに鵙の晴れ 乏しさに耐えて祭りの夜は奢り 千枚の田に水足って稲の花 聲高に言葉かけ合う喜雨最中 一行を穂に書き足す月明り 踏青や深き彫り字の農魂碑 鍬持つ木の芽力を溜めており 夜なべする妻の姿も母に似て 昭和六十二年十月　建立　小阿賀吟社 田中郁郎書	撰人 東城　素秋 佐藤　安衛 今井　天花 鈴木　聖太 板垣　麦村 石井　楽秋 加藤　喜秋 佐藤　志残 小林　竹生 坂爪　句峰 坪谷　耕雨 石井　郷花 今井　夫子 今井　秀虹 坪谷　十九一 笠原　茶山 中村　鬼情 谷井　野武士 宇野　多収 阿達　信峰	（『横越町史』より） 昭和六十二年十月十一日、木津農業構造改善センターの竣工を記念して公民館主催により開催された、新潟県各派連合俳句大会の各部門において、小阿賀吟社同人が一位を含め、多くの入選者を出した。そして同日、同センター前庭には、二〇人の句が刻まれた小阿賀吟社の合同句碑が建立された。	
	2	郭公の高啼き村の朝始まる	坪谷　十九一	（碑陰） 坪谷専務退任記念 贈句碑一基 横越村農協職員一同 平成元年七月　田中郁郎書	
	3	鍬始農一筋を通し来て	坪谷　雅博	（碑陰） 坪谷雅博（耕雨） 句歴四十五年を記念 （略） 平成五年七月	

七　木津地区研修センター敷地内の句碑②（木津二丁目）

全景写真	No.	碑文	作者	解説	写真
	4	剪定に燃やす漢瑰芽吹く	今井　照雄	（碑陰） 今井照雄（秀紅）追悼 （略） 平成五年七月	
	5	菜の花を映し眩しき夜明雲	今井　天花	（碑陰） 今井天花句歴六十年記念 （略） 平成六年三月	
	6	時雨るゝや暮色がつゝむ残り柿	佐藤　志残	（碑陰） 佐藤志残追悼句碑 （略） 平成八年六月吉日建立 （略）	

八　木津二丁目の交差点付近の句碑

全景写真	No.	碑文	作者	解説	写真
		夕かなかな一兵たりし日は遠く	坪谷　十九一	（碑陰） 区画整理組合事業竣工記念 （略） 平成四年十一月	

九　圓通寺境内の句碑（木津四丁目）

全景写真	No.	碑文	作者	解説	写真
		大年や鍋釜一とつ新らしき	東城　素秋	（碑陰） 小阿賀吟社建立 （略） 昭和四十六年八月	

十　松願寺境内の句碑（小杉一丁目）

全景写真	No.	碑文	作者	解説	写真
	1	杖とりて夏炉を立つも　なまいだぶ	高野　素十	（碑陰） 当山三十六世釈法観釈尼美留は寺門の中興なり。 昭和二十一年六月素十来訪しそのすがたをほめて。	
	2	羅漢樹や寺歴七百五十年	玉木　豚春	（貫主より聞き取り） 玉木豚春さんはたびたび同寺を訪問し宿泊していた。昭和三十～四十年代の作。	

十一　横越地区公民館敷地内の句碑（いぶき野一丁目）

全景写真	No.	碑文	作者	解説	写真
		茂師の時雨るゝまゝに真可南	佐藤　愛林寺	（碑陰） 建立小阿賀吟社 （略） 昭和四十五年十一月二十三日 銘板 佐藤　愛林寺の句碑　東城素秋　書 茂師の　時雨るゝまゝに　真可南 この句は、昭和五年（一九三〇）に、東京日日新聞社と大阪毎日新聞社が共催して募集した「日本新名勝俳句」に応募した句である。選者は高浜虚子で選句は自由、優秀句を二〇句とし、帝国風景院賞として、一句百円を贈るものであった。応募句数は一〇万三千二百余句で、金賞は杉田久女であった。愛林寺のこの句は、見事入賞を果たしている。 愛林寺は俳号で、本名は佐藤傳一郎、愛林寺の生家は横越下（現横越東町）の大地主の家柄であったが、二十歳に家を継ぎ、大正六年（一九一七）五月、横越村役場に奉職した。昭和二十一年十一月に助役となり、昭和二十二年四月、民選初代横越村長に就任し、一期四年を務めた。 句碑建立に際し、愛林寺の直筆が見つからず、小阿賀吟社の長老東城素秋が揮毫した。後に見つかった直筆の句は「茂士の時雨るまゝにたはこかな」であった。 昭和四十五年十一月、旧横越公民館前庭に建立。平成二十二年四月、現在地に移設された。	

追加（講演会以後に判明した句碑）
十二　円周寺境内の句碑（早通二丁目）

全景写真	No.	碑文	作者	解説	写真
		人は死に人は生るる草かな	長谷川　耕畝	（碑陰） 初代長谷川義雄　俳号 耕畝　大正十五年五月二日 中蒲原郡荻川村三ツ屋に生まる。若くして俳句を中田みづほ、高野素十両師に学び、俳誌「まはぎ」及び「芹」に参加し、全国にその俳才を知らる。新潟俳句会俳誌「雪」の創立に参画し、終生運営に尽力するも、平成十三年十二月七日病没す。享年七十六歳。育成せし弟子三百余名、著作には『句集雪の花』『夕紅葉』『新雪』『夏鳥』及び『耕畝遺句集』あり。句評集に『玉露』『露玉石』編集に『季十字句集』『みづほ全句集』『わが愛誦句集』等あり。遺句と共にその偉業の一端を刻み以て子孫に示す。 平成十四年二月吉日 同門　句友　医学博士 蒲原　宏　撰並書	

十三　成願寺境内の句碑（割野）

全景写真	No.	碑文	作者	解説	写真
		古文書の虫干して了えて安ど可な	小熊　雅夫	（碑陰） 昭和六十年夏日 小熊雅夫建	

注
① 各碑の碑文は原字表記は、刻字のままとしました。
② 解説は江南区産業振興課の提供資料と碑陰・銘板を参考とした。
③ 碑陰は適宜句読点・句点を補記した。

参考文献
① 『亀田郷　ゆかりの文人集』　亀田郷ゆかりの文人展実行委員会　2005年
② 『横越町史　通史編』　横越町　2003年
③ 『新潟俳句会　会報』　新潟俳句会　2003年

資料提供者（敬称略）
蒲原宏
今井誠
江南区産業振興課
江南区郷土資料館

江南区の主な句碑一覧
平成二十五年十一月十日　発行
編集兼発行　新潟市立亀田図書館
〒950－0144
新潟市江南区茅野山三丁目一番一四号
電話　025－382－4696
Fax　025－381－8003

資料３　講演会のチラシ

亀田図書館開館一周年記念事業

講演会「江南区の主な俳人たち―思い出ばなし―」

◆日時：平成 25 年 11 月 10 日（日）

午後 2 時～3 時 30 分

（開場：午後 1 時 30 分）

◆講師：蒲原　宏さん

（俳誌「雪」主宰・元新潟県立がんセンター新潟病院副院長）

江南区で活躍した主な俳人たちについて，先生との関わりや句会の様子などについてお話をしていただきます。

◆会場：亀田地区公民館　多目的ルーム１・２

（新潟市江南区文化会館内）

◆定員：先着 100 名（無料）応募者多数の場合は抽選となります。

◆申込み：下記の申込書をご記入の上 FAX か

直接亀田図書館へお申し込みくださ

【会期中の催し】

・展示会:「中田みづほ・浜口今夜・高野素十・及川仙石
　　生誕120周年記念展」

・会場:亀田図書館 2 階 「特別コレクション室」

・会期:開催中　12 月 28 日(土)まで

お問合せ先

〒950-0144　新潟市江南区茅野山 3-1-14

新潟市立亀田図書館（江南区文化会館内）電話 025-382-4696　FAX　025-381-8003

資料４　展示会の看板

江南区ゆかりの俳人たち

中田みづほ・浜口今夜・高野素十・及川仙石

生誕 120 周年記念展

江南区に深く関わった４人の俳人たちの生誕 120 周年を記念し，写真や年譜などで紹介します。

会期：平成 25 年 6 月 6 日（木）～12 月 28 日（土）

＜亀田図書館の開館時間＞

会場：亀田図書館２階「特別コレクション室」

中田みづほ

浜口今夜

高野素十

及川仙石

※敬称略

主催：新潟市立亀田図書館

資料５　講演会の様子（参加者 61 人）

資料６　展示会の様子（特別コレクション室）

２階　特別コレクション室

２階　特別コレクション室

２階　特別コレクション室

２階　特別コレクション室

資料　7

【参考文献】

①　『新歳時記』高浜虚子　三省堂　平成４年増訂 60 刷

②　『新潟いしぶみ散歩道』新潟市教育委員会　平成４年

③　『新潟県文学全集第Ⅱ期　６　俳句編』郷土出版社　平成８年

④　『虚子と越後路』虚子先生・曽遊地めぐりの栞　新潟俳句会　平成９年

⑤　『横越町史　通史編』横越町　平成 15 年

⑥　『亀田郷ゆかりの文人集』新潟ゆかりの文人展実行委員会　平成 17 年

⑦　「はまぎ」昭和 13 年９月号（10 巻１号）

亀田図書館開館一周年記念

蒲原宏講演会「江南区の主な俳人たち−思い出ばなし−」記録集

平成 26 年 2 月 28 日　発行

監修者　　蒲原　宏

編集・発行　　新潟市立亀田図書館

新潟市江南区茅野山３丁目１番 14 号

電話　025-382-4696

ＦＡＸ　025-381-8003

「新潟市の図書館」ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞｱﾄﾞﾚｽ　http：//www.niigatacitylib.jp

「亀田図書館」　ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ　kameda.cl@city.niigata.lg.jp